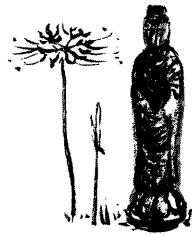


ふしぎな話

吉江 久弥



私は越中井波の産で昭和廿五年には久しぶりにそこに住んでいた。秩序が回復しつゝ、あったとは言え、戦争の爪あとがかなり残っていた頃である。私は二歳になる妹の子千鶴子を預かって朝夕心から可愛がっていたのに、その年の五月突然死なれてしまった。二十日ほど眠り続けた末に死んだのだが、その病原は他ならぬ母親から大阪で既に貰ったもので、結核の予防注射をさせたのが引金となつたらしいのである。折しも町の祭礼で神輿が家の前を通つた直後息を引取つたとか。私は汽車に乗つて遠くの村の医師の友人の許へ、何とか最後の処置がないものか訊ねに行つて不在であつたが、枕辺に戻つた私はその小さく痩せこけた頬を撫でながら慟哭した。

れんげ田の空青くしてうつつなし現うつに小さき命死ゆけば

妹は町からバスで二三十分、更に田の道を十分程歩いた森の中の専門病院に入つていた。大阪に一人残つた夫は稀にやつて来て私や母や子供をつれて一緒に見舞に行つたが、畳を敷いた一人部屋の半分がベッドで、その向うの窓からは青田と西の空が見えた。命があと半年持つかどうかという病状だったので、小さな葬式を出したことは大分後になつて妹の耳に届けられた。その時の妹の様子は意外に平静で、「その夕方雲に乗つた弥勒菩薩が千鶴子を抱いて静かに空へ昇つて行くのを見た。あれは確かに中宮寺の弥勒菩薩の御姿だつた」と言つたという。その不思議さそのイメージに私は感動した。妹は完全治癒ではないが奇跡的に退院でき、その後北海道や枚方に夫と暮した。その間大阪で又何年も入院生活をした。北海道にいるうちのことであるが、小学校時代のライバルであつた親類筋の男―東大を出て金沢で教師をしていた―の夢を突然三晩も続けて見、不思議に思つて音信をしたところ、丁度その頃彼が結核で死んだという返事を得たという。生活の交渉も文通の経験もないというのに不思議なことだ、と私はこの話を聞いても感動した。

病身の為離縁させられた妹はここ数年枚方に一人住いをし、時々私どもに来て滞在するという生活であつたが、この七月廿二日に夏を越そうとやつて来て、八月に入るや夜となく昼となく次第によく眠る様になり、遂に十日の早晩眠つたまゝ、

覚えなかった。心不全ということである。来て廿日目に当る。私はスクーリングのことにかまけてしまっていたが、その四五日前から、床に就くと「アフTONの流れ」という歌の一節がふと浮んで来て、それが毎夜続いた。少女時代に妹が歌っているのを傍で聞いて何となく覚えていたもので、どこかの国の民謡で鎮魂の歌らしい。そのことをも私はやはり不思議と思う。

なきがらは動きなきまま明け近し山鳩のこゑ鳴きにけらずや

不思議ついでに言えば、子供の死んだのが九日、妹が十日。本人は前夜入院するつもりで身を清め、持物など身辺の整理をすませていたのだが、入院という形を現世にとらせ、娘が月こそ違え廿五年目の命日にかわいそうな母親を呼びに来たのであるまいか。娘は生きていたら今年廿七才、その母親の享年五十四才はその倍数に当る。そして五日後がすぐ新盆の日であつた。取り片付けを待つ枚方の部屋には小さな赤い靴が嘗て私がうつした数葉の子供の写真と共に大切に飾られているという。

悲しみの色を心に塗り重ね塗り重ねつつ老いてゆくはや

暗い話で恐縮だが、私の心の記録として認めた。

(文学部教授)

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。